

遺品整理人が見た「家族の冷酷」

「親を消す時代」が来る

遺品整理業が、活況を呈する時代。社会保障制度の不備が、これからも「消える高齢者」を増やしていくのか。

部屋を、開けるまでもなかった。異臭が扉を越えて伝わってきた。愛知・三河地方の団地の3階に住んでいた75歳の男性は、

死後10日間、その部屋に放置されていた。布団は、人形に変色していた。

故人の遺品を整理する会社「キーパーズ」を日本で初めて立ち上げた吉田太一さん。2002年の立ち上げから3年後の夏に扱ったこの事案を、吉田さんは忘れられない。遺品整理を頼んだ50代の長男は、この部屋の二つ上の階に子どもと一緒に住んでいたのだ。

「そんな近くに住んでいて、こんなになるまで父親が死んだのに気づかなかったんかと」

著書『遺品整理屋は見た!』

にも記したこのエピソード。これが単なる変わり者の話で片づけられなくなったのが、今回の「消えた100歳」問題だ。家族が、家族を見捨てる。そんな光景はもう「異様なもの」ではなくなってきた。

では、どんな高齢者が「消される」のか。

世代間の違いが要因?

「年間千件くらい扱うのですが、『あんなもん親じゃないから』とか『親と違っていないから、遺品も好きにしてくれ』と依頼主から言われるケースが年に10人くらいあつたんです。詳しくは聞かないんですが、そういう場合は家族を捨てたり酒癖が悪

かったりと、親のほうに原因があるケースも多いんじゃないでしょうか(吉田さん)

しかしそれにしても、親を捨てるのは尋常ではないはず。だが、元検事で高齢者問題に詳しい堀田力・さわやか福祉財団理事長(76)は、

「消えた100歳」の子ども世代は、親の世話をするという感覚のない第一世代」と指摘する。

「団塊世代の親にあたる世代は、サラリーマン第一世代、核家族

第一世代でもあります。この世代は「自分たちの収入は自分たちだけで使うものだ」と考える。農家を基本とし、収入は一族一家全体のものだと考える戦前世代とは考え方が異なるのです」

親を大事にしないということではないが、子どもがお金や時間を使って親の面倒を見るという意識が染みついておらず、親も自分の財産と才覚で死ぬまで暮らしていくものだ——そう考える世代が、ちょうど今、100歳以上世代を「消している」

世代にあたるというのである。戦後世代が高齢化していくに従って、「消える高齢者」はさらに増えていくのかもしれない。

年金の不正受給という観点から「消える高齢者は増える」と警鐘を鳴らすのは辛坊治郎・読売テレビ報道局解説委員長だ。今回の騒動では、高齢者の所在確認が難しい、またはそれを見つけたいたケースが散見される。

「そもそも年金という公金を払っている以上、実際にちゃんと払われているかを把握するのは行政の義務。そういう仕組みを作らなかったのは怠慢ですし、公金を扱っているという意識が足りないと思えません」

年金不正受給問題

現在の年金制度において、いまの受給資格者は若年層に比べて圧倒的に有利な受給条件だ。年金制度のゆがみが、不正受給への誘惑を高めていると辛坊さんは指摘する。

「100歳以上が今回たまたま問題になりましたが、もつと年齢を下げると不正受給の問題はさらに広がっているでしょう。今回の件が抑止力にはなると思いますが、年金受給者を確認する仕組みを整備すると同時に年金制度そのものも立て直さないと、また高齢者は『消えて』いきますよ(辛坊さん)



杉並区では都内最高齢の113歳の女性の所在がわからなくなっている。長女と同居していたはずの部屋は1Kで、2人が住める広さではなかった

編集部 福井洋平